白くま王ワレモン（KING VALEMON, THE WHITE BEAR）　ノルウェー

原話：『Tales from the Fjeld』Peter Christen Asbjornsen／G.W.Dasent 英訳
再話：2021.07.13 村上郁

昔むかし、ある王さまに、お姫さまが三人ありました。上のふたりは意地悪でしたが、末のお姫さまは、まるで晴れた日のように美しくて優しかったので、だれもが好きになりました。

あるとき、末のお姫さまは、ゆめの中で、金の花輪を見つけました。それがあまりにも美しかったので、お姫さまは、目が覚めてからも、それを手に入れなければ生きていけないと思いました。そして、悲しみにしずみ、日に日に口数が少なくなっていきました。

王さまは、国じゅうの金細工師に命じて、金の花輪を作らせました。けれども、どれもお姫さまがゆめで見た花輪ではありませんでした。

ある日のこと、お姫さまは森を歩いていて、いっぴきの白くまが草の上にすわっているのを見つけました。白くまは、足のあいだに金の花輪を置いて遊んでいました。それは、お姫さまがゆめで見た花輪でした。

「その花輪を売ってちょうだい」と、お姫さまはいいました。白くまは、

「これは売り物じゃないんだよ。でも、あんたがわたしの妻になるなら、あげてもいいよ」といいました。お姫さまは、

「ええ、いいわ。花輪をくれるんなら」と答えました。

お姫さまは花輪をもらい、三日のちの木曜日に、白くまがお姫さまをお城にむかえに行くことになりました。

お姫さまは、金の花輪を手に入れて、大よろこびでお城に帰りました。お城の人たちは、お姫さまがまた元気になったので、ほっとしました。王さまは、白くまがお姫さまをむかえに来たら、すぐに追いはらってやろうと考えました。

木曜日になると、王さまの軍隊がお城を取り囲んで、白くまがやって来るのを待ち構えました。ところが、白くまは、兵隊たちを右に左に投げ飛ばし、みんな、山のようにおり重なって倒れました。王さまは、このままではたいへんなことになると考えて、一番上のお姫さまをさし出しました。白くまは、お姫さまを背中に乗せて走り去りました。

白くまは、どこまでもどこまでも走って行きました。やがて、白くまは、お姫さまにたずねました。

「これ以上やわらかい所にすわったことがあるかい。これ以上はっきり見えたことがあるかい」

お姫さまは答えました。

「ええ。お母さんのひざの上はもっとやわらかだったわ。お父さんのお屋敷ではもっとはっきり見えたわ」

「じゃあ、あんたは、にせ者だ」

白くまはそういって、お姫さまを追い返しました。

つぎの木曜日、白くまはまたやって来ました。王さまは、また軍隊をくり出しましたが、兵隊たちはまるで草のようになぎ倒されてしまいました。王さまはしかたなく、二番目のお姫さまをさし出しました。

白くまは、お姫さまを背中に乗せて走り去りました。

白くまは、どこまでもどこまでも走って行きました。やがて、白くまは、お姫さ

まにたずねました。
「これ以上やわらかい所にすわったことがあるかい。これ以上はっきり見えたことがあるかい」
お姫さまは答えました。
「ええ。お母さんのひざの上はもっとやわらかだったわ。お父さんのお屋敷ではもっとはっきり見えたわ」
「じゃあ、あんたは、にせ者だ」
白くまはそういって、お姫さまを追い返しました。
　そのつぎの木曜日、白くまはまたやって来ました。王さまは、また軍隊をくり出しましたが、兵隊たちは前よりひどくなぎ倒されてしまいました。とうとう王さまは、末のお姫さまをさし出すほかありませんでした。白くまは、お姫さまを背中に乗せて走り去りました。
　白くまは、どこまでもどこまでも走って行きました。深い森の中まで来たとき、白くまは、お姫さまにたずねました。
「これ以上やわらかい所にすわったことがあるかい。これ以上はっきり見えたことがあるかい」
「いいえ。ないわ」と、お姫さまは答えました。
「じゃあ、あんたは、ほんとうのあの人だ」と、白くまはいいました。
　白くまは、お姫さまをすばらしいお城に連れて行きました。お姫さまはそこで何の不自由もなく暮らし始めました。白くまは、そのお城の主（あるじ）で、ワレモン王といいました。昼間はどこかへ出かけて行き、夜おそく帰って来てお姫さまといっしょに眠りました。ベッドに入るとき白くまは人間になりましたが、真っ暗闇の中、お姫さまにはそのすがたを見ることができませんでした。
　一年たつと、お姫さまは赤ん坊を生みました。けれども、赤ん坊が生まれ落ちるやいなや、白くまは、その子を背中に乗せてどこかへ連れ去りました。そのつぎの年も赤ん坊が生まれましたが、白くまは、やはりどこかへ連れ去りました。三年目も、生まれた赤ん坊は、どこかへ連れ去られました。
　こうして三年たつと、お姫さまはだんだん気持ちがしずむようになりました。そこで、一度家に帰って、両親の顔が見たいと思いました。白くまは、
「そうだね、帰って来るといい。でも、お父さんのいう事は聞いても、お母さんの願いは聞かないと約束しておくれ」といいました。
　お姫さまがお城に帰ると、親たちは大よろこびしました。お姫さまは、白くまのお城でどんなふうに暮らしているか話しました。母親は、
「ろうそくを持って帰って、その人がどんな人なのか、すがたを見て来ておくれ」
とたのみました。父親は、
「だめだ。そんなことをしてもひどい目にあうだけで、何もいいことはない」といいました。けれども、お姫さまは、ちいさなろうそくの燃え残りを、こっそり持って帰りました。
　夜になると、白くまが帰って来て、ベッドに入りました。お姫さまは、白くまが寝息を立てるのを待ちました。それから、ろうそくの燃え残りに火をつけて、白くまを照らしました。それはすばらしく美しい若者でした。お姫さまはじっと見つめました。そのとき、とけたろうそくがひとしずく、若者のひたいに落ちました。若者は目を覚ましました。

「何ということだ」と、若者はいいました。「ぼくは、トロルの魔女にまほうをかけられて、昼間は白くまでいなくてはならなかったんだ。あなたがあとひと月がまんして、ぼくのほんとうのすがたを見ないでいてくれたら、ぼくは救われたのに。でも、こうなったら、ぼくは魔女の所へ行って、魔女と結婚しなくてはならない」

お姫さまは泣きました。そして、

「わたしをいっしょに連れて行って」とたのみました。けれども、若者は、

「だめだ。どうしようもないんだ」と答えて、白くまのすがたになって、出て行きました。お姫さまは、白くまを追いかけて行って、背中に乗りました。

ふたりは、がけや丘をこえ、やぶやいばらのしげみをぬけて行きました。お姫さまの服はぼろぼろになりました。つかれ切って、とうとうお姫さまは、手を放してしまい、白くまの背中から落ちて、そのまま気を失いました。

ふと気がつくと、お姫さまは大きな森の中にいました。お姫さまは、起き上がって、当てもなく歩いて行きました。

長いこと歩いて行くと、小屋が一軒ありました。小屋には、おばあさんと、小さな女の子が住んでいました。お姫さまは、たずねました。

「白くま王ワレモンを見ませんでしたか」

「見ましたよ。あなたは、ワレモン王と結婚するはずのかたですね。今朝早くここを通って行きました。でも、とっても急いでいたから、追いつくことはできないでしょう」と、おばあさんはいいました。

女の子は、金のはさみで遊んでいました。はさみを空中でちょきちょきすると、美しい布がつぎつぎに現れるのでした。女の子は、おばあさんに、

「このはさみを、この女の人にあげましょうよ。この人の旅は苦しい旅だから、きっとこれから入り用になるわ」といいました。

お姫さまは、金のはさみをもらって、お礼をいって小屋を出ました。そして、森の中を、どこまでもどこまでも歩いて行きました。

つぎの朝、お姫さまは、また一軒の小屋を見つけました。小屋には、おばあさんと、小さな女の子が住んでいました。お姫さまは、たずねました。

「白くま王ワレモンを見ませんでしたか」

「見ましたよ。あなたは、ワレモン王と結婚するはずのかたですね。昨日ここを通って行きました。でも、とっても急いでいたから、追いつくことはできないでしょう」と、おばあさんはいいました。

女の子は、びんを持って遊んでいました。そのびんは、欲しい飲み物を何でも出してくれるびんでした。女の子は、おばあさんに、

「このびんを、この女の人にあげましょうよ。この人の旅は苦しい旅だから、きっとこれから入り用になるわ」といいました。

お姫さまは、びんをもらって、お礼をいって小屋を出ました。そして、また森の中を歩いて行きました。森は果てし無く続いていました。

つぎの朝、お姫さまは、また一軒の小屋を見つけました。この小屋にも、おばあさんと、小さな女の子が住んでいました。お姫さまは、たずねました。

「白くま王ワレモンを見ませんでしたか」

「見ましたよ。あなたは、ワレモン王と結婚するはずのかたですね。一昨日ここを通って行きました。でも、とっても急いでいたから、追いつくことはできないでしょう」と、おばあさんはいいました。

女の子は、テーブルかけを持って遊んでいました。そのテーブルかけは、「テーブルかけよ広がれ。ごちをうを出しておくれ」というと、どんなごちそうでも出してくれるのでした。女の子は、おばあさんに、
「このテーブルかけを、この女の人にあげましょうよ。この人の旅は苦しい旅だから、きっとこれから入り用になるわ」といいました。
お姫さまは、テーブルかけをもらって、お礼をいって小屋を出ました。暗い森の中を昼も夜も歩き続けました。
ある朝、お姫さまは、壁のように切り立った、高くて広い丘のふもとに着きました。そこに、また小屋が一軒ありました。お姫さまは、入って行って、
「白くま王ワレモンを見ませんでしたか」とたずねました。すると、おばあさんが、
「見ましたよ。あなたは、ワレモン王と結婚するはずのかたですね。三日前、この丘を登って行きました。でも、あなたに羽でもない限り、追いつくことはできないでしょう」といいました。
小屋には、小さな子どもたちがいっぱいいて、おばあさんのスカートにまとわりついていました。みんな、お腹を空かせて、食べ物をちょうだいと泣きさけんでいました。おばあさんは、なべに小石を入れて火にかけました。お姫さまは、
「どうしてそんなことをするの」とたずねました。
「こうやって、子どもたちに、もうすぐジャガイモがゆだるよっていうと、ひもじさが少しはがまんできるんですよ。この子たちは、まずしくて、食べる物も着る物もろくに持っていないんです」
お姫さまは、それを聞くとすぐに、テーブルかけを取り出して、
「テーブルかけよ広がれ、ごちそうを出しておくれ」といいました。たちまち、たくさんのごちそうがならびました。それから、お姫さまは、びんを出して、たくさんのコップに飲み物を注ぎました。子どもたちはお腹いっぱい食べたり飲んだりしました。そのあと、お姫さまは、金のはさみで、子どもたちのために、きれいな布をどっさり出してやりました。
おばあさんは、よろこんでいいました。
「うちの人は世界一のかじ屋だから、きっとあなたにお礼ができるよ。もうすぐ帰って来るから、少し待っていておくれ」
やがて、かじ屋が帰って来ました。そしておかみさんの話を聞くと、すぐに、鉄のかぎづめを作り始めました。あくる朝、かじ屋はお姫さまにかぎづめをわたしていいました。
「これをあんたの手足にはめて、あの丘を登るといい」
お姫さまはお礼をいって、すぐさま出発しました。
お姫さまは、手と足に鉄のかぎづめをつけて、丘を登り始めました。岩にしがみつき、昼も夜もがけをはい上がって行きました。つかれきって、もう手も足も上がらなくなって、すべり落ちそうになったとき、お姫さまは、丘のてっぺんに着いていました。
そこは、限りなく広く、畑や牧場が広がっていました。近くにお城があって、たくさんの使用人が働いていました。お姫さまは、近寄って行って、
「ここで、何かあるんですか」とたずねました。
「ここは年寄り魔女のお城でね。三日ののちに、魔女が、白くま王ワレモンと結婚式を挙げるのさ。それで、わしらはいそがしい」

「まあ、わたし、その魔女さんと話がしたいわ」とお姫さまがいうと、
「まさか。だめだよ、ぜったいにだめ」と、使用人たちはいいました。
お姫さまは、魔女のまどの下に行って、金のはさみをちょきちょき動かしました。すると、美しい布が、まい散りました。魔女はそれを見て、
「そのはさみを売ってくれないかい。わたしの仕立屋は役立たずなんだよ」といいました。お姫さまは、
「これは売り物じゃないの。でも、今晩ひと晩、あなたの恋人の側で眠らせてくれるなら、あげてもいいわ」といいました。
「もちろん、いいさ」と魔女はいいました。
夜、ベッドに入るとき、魔女は若者に眠り薬を入れたお酒を飲ませました。若者はぐっすり眠ってしまい、お姫さまが側で泣いたりさけんだりしても、目を覚ましませんでした。
つぎの日、お姫さまは、また魔女のまどの下に行って、びんからコップに飲み物を注ぎました。お酒やおいしそうな飲み物が、小川のように流れ出ました。魔女は、
「そのびんを売ってくれないかい。わたしの酒屋は役立たずなんだよ」といいました。
「これは売り物じゃないの。でも、今晩ひと晩、あなたの恋人の側で眠らせてくれるなら、あげてもいいわ」とお姫さまがいうと、魔女は、
「もちろん、いいさ」といいました。
けれども、夜、ベッドに入るとき、魔女は若者に眠り薬を入れたお酒を飲ませました。若者はぐっすり眠ってしまい、お姫さまが側で泣いたりさけんだりしても、目を覚ましませんでした。ところが、となりの部屋で、ひとりの召し使いが起きていて、お姫さまの声を聞いていました。召し使いは、どんなことが起こっているか分かったので、朝になると、若者にいいました。
「今夜は眠ってはいけません。あなたを救うお姫さまがいらっしゃいます」
夕方、お姫さまは、お城の外に出て行って、テーブルかけを広げて、いいました。
「テーブルかけよ広がれ、ごちそうを出しておくれ」
たちまち、何百人が集まっても食べきれないほどたくさんのすばらしいごちそうが、テーブルかけの上にならびました。
魔女はそれを見て、
「そのテーブルかけを売ってくれないかい。わたしの料理人は役立たずなんだよ」といいました。
「これは売り物じゃないの。でも、今晩ひと晩、あなたの恋人の側で眠らせてくれるなら、あげてもいいわ」とお姫さまがいうと、魔女は、
「もちろん、いいさ」といいました。
夜になると、魔女は、若者に眠り薬を入れたお酒を持って来ました。若者は、用心して、お酒を飲んだふりをしてベッドに入りました。魔女は、針で若者のうでをついて、ほんとうに眠っているかどうか確かめました。若者は、どんなに痛くても、身動きひとつしませんでした。魔女は、若者がぐっくり眠っていると思いこんで、部屋から出て行きました。
やがて、お姫さまが部屋に入って来ると、若者はすぐに起きあがりました。そして、ここから逃げ出す相談をしました。
朝になると、若者は、大工に命じて結婚式の行列が通る橋に、落とし戸を作らせ

ました。
　結婚式が始まりました。花嫁の魔女が乗った馬車を先頭に、結婚式の行列が進んで行きました。行列が、橋のまんなかまで来たとき、落とし戸がくるりと回って、魔女の馬車は深い谷底に落ちてしまいました。若者は、すぐさま魔女のお城に引き返すと、お姫さまを連れて逃げ出しました。
　若者は、森の中の自分のお城に帰る途中、三つの小屋に立ち寄りました。そして、小さな女の子たちを連れてお城にもどりました。それは、若者とお姫さまのあいだに生まれた三人の子どもたちでした。
　おしまい